

# 新潟県

# 公民館月報

昭和54年1月号

発行所 新潟県公民館連合会

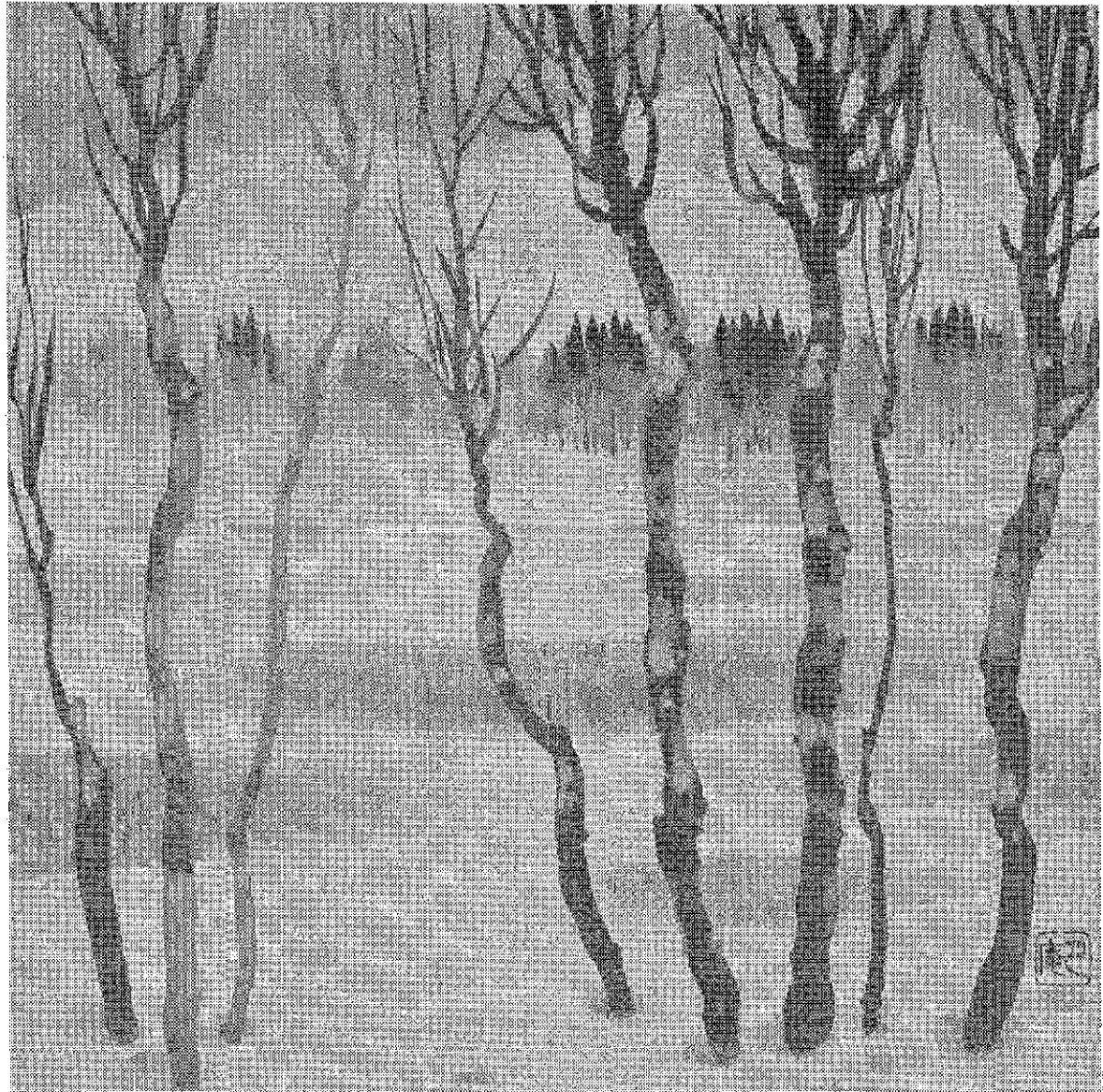
【新潟市川端町2-9・県林業会館内】

【電話・新潟(0252)24-6073】【振替新潟4094】

発行人 会長 石井耕一

編集人 事務局長 本田 清

【定価1部 70円 年共・年価 840円】



## 権現堂山之彌三郎婆

広神村の中央に権現堂という山がある。海拔九八八米。この山は金山砂鉄でできていたといわれ、俗に「鎗岩」という一つの峰で東西に分かれている。権現堂山に「鬼の穴」という深い堅坑がある。いつ頃どうしてできたか知られていないが、一寸想像もつかない深さだ。権現堂から数キロ隔った小山の麓にある「大将淵」という、神秘的な多くの伝説と万跡に富む淵まで穴は続いているといわれ、「鬼の穴」に一握りの穀殻を投げ込むと、ごうと音がして吸い込まれ数日後「大将淵」の水面に浮いているといわれる。

「雪の伝説」彌三郎婆が鬼の穴に住居するようになり、風に乗って近郷近在から赤子を奪っては食べたといわれる。私もは子供の頃、旧の十二月八日に踏く荒れるのを八日吹雪といつて、彌彦山の妙多羅婆の所に歳暮に行くのだから、さらわれないようにおとなしくしていると、炬燵の中で年寄からとんとん昔を聞かされたものだ。色々奇妙な場所と伝説に富む権現堂山は、村の象徴の如く泰然と、白雪の容姿を周囲に示している。(絵・文 大島幸吉 日本南画院会員 県展入選救回 広神村公民館運営審議委員)

# 東京で公民館振興大会



## 千両役者の揃い踏み

### 公民館予算拡充へ強い布石

公民館振興大会のわらわは、文部省が大蔵省に対して概算要求した「公民館施設費補助一一六億一、〇〇〇万円、生涯教育事業振興補助三八億八、四〇〇円」の実現にある。的ははずれていない。

東京赤坂のプリンスホテルという超一流の会場に設営された舞台には、都道府県の精英七百名と優良職員(本県推せんは柏崎市徳間助夫氏)、昭和五十四年度公民館運営予定市町村長名を前にして、田村会長あいさつ、服部公振連会長の決意表明など、内藤新文相・森喜朗文教委員長など豪華な顔ぶれが次々に立って弁舌をふるった。パネルディスカッションのメンバーにも魅力があった。元オリンピック体操選手小野道子、元文部省社会教育局長金村敬俊などに配する割合にはNHK伊集院アナといふ取りやませ。

最後に公民館振興国会議員連盟を代表して長谷川峻(岩手)の首領で声高らかに万歳三唱で幕を閉じた。



内藤文部大臣



森喜朗文教委員長



山東昭子環境庁政務次官



坂田道太元文相



NHKアナの司会で盛り上ったパネル討議

たすけあい



石井新一ノモ ④

十月の赤い羽根は非句の季題になり、共同募金を定着した。世帯別の所得や資産の計算で募金額を割当てた町内はなくなり、目標を達成できない町町村もなくなった。たしかに定着だが、形式化でないかという気もある。

一世帯、二百円が三百円のことと多くの人をわすらわさず、公費から支出してはどうか、という意見もある。豊栄市の例からみても、五十八億円の手算から三百六十万円を出すことはむずかしい。

一応その意見はもともと聞えるが、大切なのは金額でなく、たすけあいの心である。昔のことには、隣りに言が禁ではこちらは黙が立つ、というのがある。隣りに言が建てばききこんでやり、こちらも強て努力をすべきでないか。上を見れば限りなく、下を見ても限りなし、というのとほもある。労働組合は、ヨーロッパ賞金獲得を長い間叫んで来た。いまヨーロッパ並、あるいはそれを上まうようにになったが、相変わらず闘争を繰り返している。

弱い人、恵まれない人にあたたかい手をさしのべ、わが住む郷に一人の立ち者、苦しむ人がなくなつてこそ、自らも幸せなのだ、と思うようにならなければならない。

年賀はがきはお年玉つきと、さらに寄附金つきがある。寄附金つきの枚数比率を毎年減らしてきた政府はおかしいし、わずか二円安いだだけで減つて言う人々もあさましい。年賀状はいいものだ。そこに「お年玉」の影があり、たすけあいの善意がこもればさびしいのはないか。

行政制度による社会福祉は必要だが、政治の問題になると、イデオロギーをからんだ政策論争になり、暮い福祉の心が失われる。

折から盛未だたすけあい募金の季節である。エサもものとき誰んだ、マッチ売りの少女を思いだしながら考えてみた。公民館の使命は、人間性回復の社会の確立である。その方法論として、近年うろたえられたエニシ、活動も、たすけあいの心が基本になければならないのではないだろうか。(本会会長、新潟県共同募金(副会長))



# 公民館経営のあり方

③

——講師の横顔——  
 ・朝日新聞記者・明治乳業労務課長・  
 社会党静岡岡島連書記長・静岡県公通  
 事務局長など歴任、現在全公連理事。

り」であるならば、合目的に経営されるべきは言うまでもないことである。

全公連の「在るべき姿」が指摘しているように、「公民館の第極のねらいは、住民の自治能力の向上である。公民館は社会連帯、自他共存の生活感情を育成し、住民自治の実であげる場とならなければならない」のである。

前述した社会教育行政と地方自治のあり方において指摘したとおり「地域づくり」の課題が、「生活」と「生活をめぐる環境」と「からだと心」にあるとすれば、そのいずれの領域においても機能しなければならないのが、公民館の経営機能としての職員体制と公連審なのである。

残念ながら、この経営機能はいぜんとして未整備で、常勤専任化は遅々として進展していないのである。

しかし、裏返して言えば、「地域づくり」という課題に対して前向きに取り組むことこそが、多年の宿願である公民館職員の必置や常勤専任化、専門的職員化の道を開く最短距離であると言えるのである。

具体的に「地域づくり」や「新しいコミュニティづくり」について追求しながら、その必要について検証してみよう。

「コミュニティ」という言葉の概念が、それに接近する側によって多様な「コミュニティ像」として受容されているために混乱が見られる。しかし、「コミュニティ」の原点は、「親近性」であり、人々の相互作用(スキミング)である、具体的には、夏目漱石の草枕にある「向う三軒両隣り」における「つきあい」なのである。

めざす「地域づくり」は、その向う三軒両隣りにある「つきあい」のなかで、人々が「ふれ合い」ながら、会話を通して「おもしろい」をつくり、家族や家庭相互が「たすけ合う」という事実関係を構築することである。

そして、その「つきあい」の中で、生活の問題や生活環境の課題や、健康や心の問題が、市町村自治体の施策を含めて、県や国といった政治、行政とのかかわり合いをもちながら、その問題や課題を協力しながら解決していく営みが「地域づくり」であり、今日言われる「新しいコミュニティづくり」なのである。

このような素朴な考え方が、素直に実現できなくなっている現実が、今日あらためて「地域づくり」を必要としている理由なのである。フランスの詩人、ロマン・ロランの言葉をかりれば、「人間は一生、幸福という青い鳥を求めて、さまよい歩くが、死ぬまで青い鳥を見つけない人が多い、いっそのこと、青い鳥を探すことを阻んでいるもので垣根をついたら、その中に青い鳥が無い降りるかも知れない」と言っているように障害があまりにも多いのである。

公民館経営において、最も重視しなければならない点は、この営みを阻んでいる垣根(阻害条件)は何かを把握し、それを解決していくための機会と場と事業についての計画立案であり、その編成と展開である。

社会教育行政の役割について指摘したように「地域づくり」という課題へのかかわり方は、住民の主体的な活動を助成し、それを発展させていくことにあるのだから、公民館もまた具体的な学習の場や機会をとおして助成し、サービスしていく役割をもつことは言うまでもない。

しかしながら、前述したとおり、公民館において最も未整備であるのが、職員体制としての「教育機能」であ

るだけに、助成もサービスも思うようにまかせないのである。

「地域づくり」に果たすべき公民館経営は、まず何よりも優先して、公民館職員を一人でも多く、また教育専門職としての人材配置が配慮されなければならないのである。

その必要を強調するために、公民館経営における、いくつかの「死角」と「盲点」を拾いあげてみよう。

「死角」とは、首を廻さねば見えないところを言い、「盲点」とは、もの、見えないところである。

その第一は、各種の学習グループやサークルなどの「集団形成」とそれとのかかわり方についてである。いわゆる組織化の課題である。

はじめに紹介したように、きょう公民館は各種学習の花咲りで、部室貸しをクジで決めるといった状況もある。

繁栄社会がもたらした余暇の増大や、生活の便利化は、自己充足や自己安定をねがうといった新しい学習需要を惹きおこし、趣味、教養、娯楽、スポーツ、文化活動といったものから、生がい学習まで、多彩な領域に及んでいる。

そして、これらの学習は、その目的を共通する人たちのグループ、サークルなどの組織化を伴いながら活発化しているのである。

このような傾向は、ひとり公民館をはじめとする社会教育の分野だけでなく、福祉、保健、観光などという一般行政分野においても同様に活発に展開され、これに対する援助や助成もいろいろな形ですすめられている。補助金や活動の場の提供、情報や技術の提供などである。

この点について公民館が果たしてきた役割はきわめて大きなものがある。

「地域づくり」を考える場合、ともかくも、地域社会のなかで、住民の多様な要求や期待を反映した形で、多種の集団活動が多彩に、しかも重なり合った姿で活発に展開されているという状態は、必須の条件であるだけに願ってもないことである。

しかし、このような状態が、そのまま「地域づくり」につながるという考え方は早計で、手放しでは喜ばないのである。

いうまでもなく、これらの集団活動において、めざす「連帯観」や「自治意識」といったものはなかなか形成されにくいのである。

これらのさまざまな集団における「連帯観」は「帰属意識」であって、内部だけのものである。まして、目標や利害を同じくするこれらの「連帯観」が強ければ強いほど、他の利害の異なる集団との間や、その人々の間にはますます断絶を色濃くしていくことになるのである。

私は、その点に公民館経営における「死角」をかい間見るのである。

いままでの社会教育や公民館のあり方は、多分に団体的ないし集団依存であった。したがって既成の組織志向型の集団(婦人会、青年会など)とのかかわり合いで足りてきた。

しかし、きょう新しい発生集団は、おしなべて使命志向型集団である点で、その対応の仕方は大きく変化しているのである。

注 組織志向型とは、はじめに組織があって、あとから人や事業が組みこまれるもの、使命志向型とは、まず目的があって、その目的に人が集って、事業や活動が展開されるもの。

## 目標は自治意識の育成

# 朝比奈 博氏

講演  
要旨

## 地域づくりに果す

### (2) 経営論に対する逆転的発想

さて、公民館の現状を平均的視野で、その問題点である、「計画」と「評価」について追求してきたが、それだけでは経営体としてのあり方を説得するには力も弱し、訴求効果は小さい。

そこで私は、勇気を奮って既成の概念を捨て、経営についての代表とも言える企業や商店に例をあげ、素朴な経営観に立って、公民館経営論にパラドックス (paradox) で挑戦してみようと思う。

企業や商店の経営観を要約すれば、「企業や商店が構成する諸要素を、有機的合理的に組み立て、組み合わせ、最少の投資によって最大の効果をあげるようマネジメントすることである」ということになる。

かつての企業の構造は、資本と労働に二つで構成され、その生産性(利益)をめぐる配分が争点であった。

しかし、産業の近代化み技術革新の進展は企業や商店の構造を大きく変えて、今日では、資本、労働、技術、研究、流通、販売といった構成要素に加え、これらの諸要素を活用したり調整したりして、生産性をあげる経営者群(スタッフ)の登場まで、多様なしくみとはたらきを有している。

しかも、これらの生産構造をとおして生産されるものが「商品」なのである。

加えて、この企業や商店の経営に、大きくかわかり、その生産性を高める不可欠なものに情報が参加したのである。

このような経営、産業の近代化が、今日世界が目をみはる経済大国にわがくにをのしあげることに成功したのである。

だが、この企業や商店の経営において、その存亡や死活を決定づけるものは、他ならぬ「生産品」であり「商品」なのである。

国際内外の経済的背景の酷しい競争裡において、生き抜いて行くためには、その生産品や商品が市場における一定の評価を維持したり、一層高めていくことが絶対条件なのである。

今日、高度経済成長から減速経済に移行していくなかで、構造不況といわれる状況にさらされ、倒産が相次いでいる企業や商店は、例外なくその製品や商品に対する消費者評価が低下しているのである。

製品や商店の売れ行き不振は、そのまま銀行融資や資金繰りに波及し、やがて休業、倒産へと追いこんでいくのである。

そして、このような現象に追い打ちをかけているのが、情報の需給関係(メカニズム)なのである。言い換えれば、企業や商店が生き抜くことに必要な情報の募集、選択、処理などの重要作業が有効に働かなくなったからである。

近代資本主義下における自由経済社会は、産業の細分化とともに多角経営の構造化とともに、その本質とも言える「適者生存の論理」や「強肉弱食」の体質を一層むき出しにしている。

その、喰うか喰われるかという「背水の陣の」なかで、一発一発を勝負しているきびしい状況のなかでさえ倒産が相次いでいるのである。

このような企業や商店が当面している背景や問題状況を、公民館経営にあてはめて考えてみようという提案が、私の逆転的発想なのである。

その提案は、「公民館には何故倒産がないのか」ということである。

# 経営は評価される

公民館の経営構造は、施設、設備、教材、予算などの物的条件と、職員体制、教材、予算などの人的条件によって構成されている。

そして、そのいずれにも附随している機能を含めて「親方日の丸」とも言える行財政によって措置されているのだから「倒産はない」ということになる。

言うならば、法のうえにおいても、制度のうえでも、公共施設であり、教育機関であるということである。

だが、ここで私が問題とする点は、企業は「儲ける」という行為が承認され、公民館は「奉仕」するという行為が承認されているが、そのことを決定づけるものが、企業においては消費者または生活者で、公民館において、学習者であり生活者であるという点である。

別の言い方をすれば、企業や商店の存在や公民館の必要や存在を決定するのは、企業における市場評価、公民館において社会評価ということになる。

しかも、企業に対する評価はその生産品である商品をとおして評価され、公民館に対する評価は、その企画実施する事業に通して評価されるのである。

公民館が行う事業が、地域の人々の参加やその学習効果が、人々に喜ばれ、生活に照らし根づけていくといったものになっているか、どうか評価されるのである。

このような評価が不毛であったり、糺されたりするとき、公民館には倒産はないけれども、看板のぬり替えや、衣替え(他の施設との同居、支所同居や転用など)の運命が待っていることになるのである。

最近の「コミュニティセンター」の現象は、そこに教育機能が不毛にあるという状態として、その傾向とみなされよう。

さらに、いま一つ重要な問題点は、公民館と図書館の在り方を対比して、その在り方に対する評価である。

「公民館は貸館事業に傾斜し」「図書館は蔵書に傾斜している」という批判である。

例を商店にあげて考えてみよう。商店の経営機能は図式すれば、仕入—加工—製品という経路をもっている。そして仕入とは原材料である。

前述の批判は、公民館の事業が、仕入に属する原材料を軽視し、「安からう、悪からう」という事業提供から、やがて「貸館」に傾斜していることについてであり、図書館が原材料である仕入に傾斜し、製品(読書活動)の軽視にあることへの指摘であると言えよう。

「よい製品は、よい原材料によって生れる」という素朴な論理から、公民館経営における仕入を考えれば、住民の学習要求にかかわる調査や生活意識調査、あるいは、行政資料をはじめ社会教育資料、先進的事例などの情報の蒐集、ボランティアや人材発掘を含めた社会資源の活用など、すぐれて豊かな原材料であることを再考すべきではなからうか。

このように、私はいままでの経営の在り方についての演繹的な追求方法を「下から上へ」という帰納的な追求方法にきりかえ、事実や実態を現場検証的にとらえ直すことによって、新しい公民館経営の展望を見つけ出すことを確信している。

### (3) 地域づくりと公民館経営

これまで考察してきたことは、公民館を経営体として再考しながら、そのあり方について新しい側面から接近を試みたものであるが、経営体それ自体が、目的達成をめざす行為であることに変わりはない。

したがって、今日公民館がめざすものが、「地域づく



# 新津市山の手の第二分館



## 高令者大学講座七年

### 強い向学心を持つて参加

新津市公民館は、設けが分館としては、今から七年前のことで三回までは、南保宮にあって市内の周辺に所を会場に開設し、四回目からは十三の分館が点任し、現在まで市の老人センターの施設でいる。その内の二を会場としている。

分館が山の手の第二分館である。

毎年度始めに、運営会(町内会長・老人クラブ会長・婦人会長・PTA会長・青年会長)には高令者大学講座開



(ちよっとひとやすみ・歩け歩け運動)

わが分館の地域は、秋葉一丁目、秋葉二丁目、秋葉三丁目、本町四丁目、区おひろ海谷本町の五町内の高令者対象に、受講希望を募り出席簿を製作のうえ毎回出席をとることとしている。講座は毎月一回で、午前は十時から講義午後一時から三時まで。座談会あるいは映画・民謡等さまざまなコーナーの日程としている。

第一回は五月二十八日開講式で分館長の挨拶。次いで求道志田保市長殿および市連会長長の田中高一郎殿の祝辞あり。やがて講師新潟市長小野寺中道新四郎殿の「県教育の重要性と青少年健全育成」について一時間余の講演あり。(受講希望者九十六名中この日の出席者八十三名)子を持つ親として若い主婦にも聞かせたかったと異口同音に感銘を述べた。

第二回は六月十一日で菅原先生の「良寛さんの心」について約一時間のお話を承り一同良寛さんの美しい心の姿を伺い知ることが出来たと喜んだ。

## 妙高高原町毛祝坂公民館



(飯合ごはんで屋食)

子供会を育てて四年目をむかえた。発足以来、公民館の活動の中に「子供会育成部」として位置づけられている。

主な事業としては、早期マシソン・ハイキング、球技大会・奉仕活動など、その他、郵送一般事業や町公民館と協働の事業等にも進んで参加している。

中でも子供たちの楽しみにの一つである「泊りのキャンプ」も今年で二年目。キャンプ場は雲山の雑木林(密地)の一部を子供達のために開放してもらい、役員と子供たちの手によって作られた。子供たちは焚火の張り友、炊飯の準備

### 連帯感を育てたい 雑木林を伐り開いてキャンプ

第二回は七月二十八日、午前中は映画、午後は笹神村の光田寺渡辺住職さんのお話を通して人間関係についての講話で一同は素朴な面白さを感じた。

第四回は八月六日。この月に限り暑いので、松風吹きわたる秋葉公園の五等樹(会場)を移した。地

第五回は九月十九日、小須戸町(関心)が深く向学心も強く、講座の回数数を増加してもらいたい希望が多く、盛り上げて来ている。

高令者大学講座に平行して歩け歩け運動を実施している。期間は七月、八月の二ヶ月で毎月、水の金(午前六時半まで秋葉公園五等樹)に集合、六時半から暫の言葉をお話し、続いて十五分間体験談を自由に発表し合い、六時四十五分からランゴ体操、各種の踊りの練習、七時解散帰宅する。

子供会を育てて四年目をむかえた。発足以来、公民館の活動の中に「子供会育成部」として位置づけられている。

主な事業としては、早期マシソン・ハイキング、球技大会・奉仕活動など、その他、郵送一般事業や町公民館と協働の事業等にも進んで参加している。

中でも子供たちの楽しみにの一つである「泊りのキャンプ」も今年で二年目。キャンプ場は雲山の雑木林(密地)の一部を子供達のために開放してもらい、役員と子供たちの手によって作られた。子供たちは焚火の張り友、炊飯の準備

備を役員の指導によってやらせた。一年目の時など「いも」の皮むき、むきできない子供が多かった。

家庭をはなれ友達と天幕の中で寝ることも楽しみであったようだ。自然の中でキャンプファイヤーに興じたり、小鳥の声をきながら木の上にのぼり、山の香を求めては、いつまでも子供たちの心に残る事だろう。

来春はこの場所には草を移植する予定であり、将来この林一帯を菅原氏の「森の森」にした

(新津市山の手の第二分館  
長・井浦石松)

妙高高原町毛祝坂公民館  
竹内三郎

